中島敦の外地体験

－ 植民地朝鮮と南洋諸島を巡って －

崔 俊 鎬*
(e-mail: junhochoe@hotmail.com)

目 次

1. はじめに
2. 中島敦の植民地朝鮮体験
3. 南洋への眼差し―「光と風と夢」
4. 南洋体験と作品―『南島譚』
5. まとめ

１．はじめに

名の知れた漢学者の家柄に生まれた中島敦は、幼い頃から父親の転勤に伴い、幾多の地域を転々としながら生活してきた。したがって彼は、自分の原風景としての故郷を一般的な過程において内面化する機会を失ってしまったのである。植民地朝鮮における六年余りの生活は彼のこのような帰属感の希薄さを一層深める一因となったことは疑う余地もない。その後、内地日本に戻って生活することになったものの、いくつもの知り合いや親戚の家を転々とし、一定の地域に根を下ろして生活していたと見るのは難しい。また、幼い時期において生母を亡くし、以後二人の継母の下で成長することとなった彼は、家族の中に自然に溶け込むことができず、自分の居場所がないことに気づき、このような彼の心情は後の文学作品から読み取れる孤独感と自らのアイデンティティを追求する姿勢を涵養する契機となった。

中島敦の生涯から読み取れるこのような二つの特徴、帰属感の不在による浮遊物のような、また中間者のような感情と、家族という一次的な共同体の中においてさえ孤独感と孤立

*全北大学校　日語日文学科　講師

www.kci.go.kr

感に甘んずることしかできなかった環境こそ、彼の文学作品を理解するための何よりも重要なキーワードであることは明白だといえる。それでは、このような二つの特徴を持ち合わせた作家中島敦が書き記した作品はその後どのように評価されているのか。

33歳の若さで持病の喘息が悪化して帰らぬ人となった中島敦は、亡くなる直前の約1年間本格的な文学活動を行っており、彼の作品が日本の文学史上において注目を浴びるのは、日本の敗戦以後のことである。敗戦直後、日本文学はその存在意義を自ら証明しなければならない立場に置かれた。戦間期において自国の帝国主義および植民地主義による侵略戦争に加担し偏向的な色彩を放った日本文学は、戦後自らの反省を通して生き残りを図らねばならず、この過程において帝国主義と植民地主義に抗する作品、いわゆる左派イデオロギー的な作品群が脚光を浴びるようになる。しかし、そのような文学作品は、戦間期の文学がそうであったように、特定のイデオロギーに偏向しているという限界をも合わせ持っており、イデオロギー的な作風とは距離を置いた純粋な文学作品に対する要求が芽生えた。このような状況の中で中島敦の一連の中国古典をモチーフとした作品群が、イデオロギーに汚染されていない文学として注意をひき、肯定的な評価を受ける契機を迎えた。そのため、今日においても中島敦の代表作は、その後に教科書に採録されて広く知られるようになった「山月記」や「李陵」などのいわゆる純文学作品とされる。しかし、これらの中国の古典からモチーフを借りた漢文体によって記された作品群にのみ注目が集まることは、中島敦という作家の一面だけに注目するという不均衡の問題を伴う。先述したとおり、中島敦はその短い生涯において少年期の植民地朝鮮での生活体験や、青年期の満州への渡航、そして晩年の南洋諸島での滞在経験など、帝国日本の外地を渡り歩いた全方位的な作家としての一面も備えている。また、このような彼の幅広い＜外地体験＝異文化体験＞によって生み出された作品群、中でも植民地朝鮮を舞台にして書かれた一連の作品群（「巡査のいる風景」「プウルの傍」「虎狩」）に関しては、これまでそれなりの研究が蓄積されてきた。

戦後の日本文学界の脱イデオロギー的な色彩を象徴する作家の一員とされ、今日においては国語教科書にその作品が採録され有名な作家となったものの、これらは中島敦という文学者がもつ多様性の中の一部に過ぎないという点を再確認する必要がある。そして、中島敦という作家をもっと多角的な視点によって理解するためには、彼がもつもう一つの側面である外地体験を基盤として書かれた作品に関する再評価の必要性が今一度求められる。つまり、これまで形成されたいわゆる純文学作家としての中島敦像の背面にある、植民地文学者としての姿を、植民地朝鮮だけでなく晩年の南洋諸島での体験をも合わせて考察し、それらをテーマにした作品における彼の外地に対する表象と認識の諸相を浮き彫りにさせる必要がある。

中島敦の外地体験は先述したように大きく二つに分けられるのだが、まず京城中学校での学生生活を中心とした植民地朝鮮における経験、もうひとつは晩年に約8ヶ月の間、文

www.kci.go.kr

部省の教科書編纂事業の一環として南洋諸島に滞在した経験がそれである。本稿においては、これまで多くの研究者によって考察された前者と、比較的にこれまで注目されなかった後者を合わせて分析することによって、中島敦が持つ外地に対する眼差しの変容を辿り、その実体を明らかにする。

2. 中島敦の植民地朝鮮体験

まずこの節においては中島敦の初期の外地体験にあたる植民地朝鮮との関連性を持ついくつかの作品分析を通して、彼の植民地朝鮮に対する認識の模様を概観してみる。年譜によると中島敦は1920年9月に父親の竜山中学校への転勤に伴い、11歳の時に初めて内地を離れて植民地朝鮮へと渡り、京城にある竜山公立尋常小学校五年生へと転入学した2)。そして二年後の1922年4月には当時の植民地朝鮮において秀才が集まるといわれた京城中学校に入学する。この時、同級生には後に植民地朝鮮における「三・一独立運動」という政治的な出来事を背景に日本人少年と朝鮮人少女との間に芽生えた淡い初恋の物語を記す湯浅克衛がいた。3)

当時の植民地朝鮮では学制上一部を除いては朝鮮人と日本人とは異なる学校に通うことになっており、中島敦が通った京城中学校は日本人学校であったため、彼の周囲で朝鮮人との接触はそれほど頻繁になされていなかったはずである。しかし、後にこの時期のエピソードを基にして「虎狩」と「プウルの傍で」が書かれ、作品の中で朝鮮人を重要な登場人物として描いていることから、彼の朝鮮人に対する関心が既にその植民地での生活に自然と溶け込んでいたことが分かる。優等生として真面目に京城中学校に通っていた中島敦だが、1925年10月に父親が竜山中学校を退職して関東庁立の大連第二中学校へと転勤し、同じく京城に住んでいた伯母の家へ移り住んだ時期から、学業成績が落ち、またクラスメートの試験答案を代筆したことが発覚して謹慎処分を受けるなど、これまでの優等生としてのイメージから逸脱した一面も見せている。また、この時期に中島敦は京城中学校のサークルに所属し、そこでいくつかの文章も発表しているといわれており、その文学に対する関心の芽生えが上記の逸脱の一因である可能性も否定できない。4)そしてこのような中島

2)「中島敦年譜」『中島敦全集』第三巻、1993、pp.445-459

3)湯浅克衛は『文学評論』（1935年4月号）に「カンナニ」という題目で、植民地朝鮮を舞台に朝鮮人少女と日本人少年との淡い初恋の物語を書いた。

4)川村湊によるとこの時期、中島敦が京城中学校において文学サークルに所属し、何らかの文章もしくは習作を発表していたことは確認できるものの、その実物はいまだ見つかっていないと述べる。（川村湊（2009）「帝国に抗する力を表現した作家」『中島敦―生誕100年、永遠に越境する文学』、pp.2-15)

www.kci.go.kr

敦のはじめての外地体験は1926年4月の第一高等学校文科への入学を機に終わるのだが、一高在学時においても学業の傍ら、『校友会雑誌』に習作を投稿してその文学的才能を徐々に開花させていった。5)しかし、このように中島敦が文学に興味を持ち始め、創作活動に乗り出した頃、運命のいたずらのようにこれから生涯に渡って彼の身体を疲弊させ、精神をも苦しめる持病となる喘息の発作が始まった。そのような状況においても彼の文学との係わりは続き、1929年4月からは文芸部委員となり『校友会雑誌』の編集にも加わり、6月には植民地朝鮮を舞台にした小説「巡査の居る風景―一九二三年の一つのスケッチ―」（以下「巡査の居る風景」）を発表する。この作品は発表当時、官憲の検閲の目を避けるために、「蕨・竹・老人」という牧歌的な雰囲気の漂うもう一つの作品と共に「短編二つ」という総題が付けられたとされる。6)それでは中島敦の初期作品であり、また外地を舞台したはじめての本格的な小説ともいえる「巡査の居る風景」の内容とそこに描かれている植民地朝鮮と朝鮮人の諸相を分析してみよう。

「巡査の居る風景」は植民地朝鮮を舞台として被支配者の一員でありながら支配者側に加担している、朝鮮人巡査「趙教英」の視線を通して、1932年の京城の風景を描いている作品である。陰湿で暗い雰囲気が漂う京城の街の描写から始まるこの作品は「趙教英」と関連する幾つかのエピソードを中心に進められる。巡回の際に電車に乗り込み、運転手の傍に立つのを習慣としていた「趙教英」は、ある日その場所に日本人の中学生が突っ立っているのを目の当たりにする。奥に座ることを求める運転手の言葉を無視したその中学生は、むしろ自分と同じく運転手の横に突っ立っている「趙教英」を睨みながら、彼がそこにいる限り自分も中には入らないと言い張る。「趙教英」はそのような日本人の朝鮮人である自分を蔑視する目付きを不快に感じながらも、それに対して何の抵抗もできない。しばらくしてから、電車の中が騒がしくなる。白い朝鮮服を着た学生らしい青年と日本人女性が言い争っていた。日本人女性が朝鮮人青年に席を勧める際に使った言葉が争いの発端だった。彼女はその青年に「ヨボさん」と呼びかけたのであった。日本人が朝鮮人に対して侮蔑の意を込めて使用する「ヨボ」という呼称を、その日本人女性はただ「さん」を付ければ良いものと思い、朝鮮人青年に向かって使用した。青年は彼女の言葉に対して不快感を露にし、彼女の無礼に対してひどく憤りを覚える様子であった。

このような光景を目撃した「趙教英」の頭の中にもう一つの「ヨボ」に関連する出来事が浮かんできた。その日の午後、府会議員の選挙演説に立ち会った彼は、朝鮮人の候補者が演説する際に、その候補者に向けて「黙れ、ヨボの癖に」と聴衆から野次が飛ばされたのを聞いた。しかしこれに対してその朝鮮人の候補者は自分を「光栄ある日本人」の一人だと主張してその場を凌いだ。「趙教英」はこの二人の朝鮮人の態度の違いにつ

5)前掲の「中島敦年譜」によると、1927年11月の『交友会雑誌』第313号に「下田の女」が、1928年11月の『校友会雑誌』第319号に「ある生活」「喧嘩」が掲載された。
6)「解題」『中島敦全集』第一巻、1993、p.486

www.kci.go.kr

いて思いを巡らせながら、また日本という国と朝鮮という民族に対してその思考を膨らませていく。近頃「何か忘れ物をした時に人が感じる」どことなく落ち着かない状態が続いていた「趙教英」は、得たいの知れない重圧感に押しつぶされそうになり、またその重圧感の本質を明らかにしようとする自分の行動に恐怖心を抱く。もちろん、その恐怖心の正体は植民地的な差別に対して抵抗した場合、その結果として襲い掛かる暗澹たる未来に対する恐怖であることを彼は知っている。

昌慶苑で電車を降りた「趙教英」に通りかかった日本人紳士が近寄って、礼儀正しく総督府の高官の家をたずねる。彼は朝鮮人である自分に丁重な口調で礼を備えて接してくれたその日本人紳士の態度について、無意識にではあったものの嬉しさを感じてしまった自分自身に対して困惑しながら、このような感情が朝鮮人の民族性から起因するとの認識を示す。そして、折りしも道端でしゃがみ込んで用を足す、同じ朝鮮人を目撃して、堂々と立って用を足すこともできない朝鮮民族の習性から卑屈な精神の一面をうかがう。

ここで物語の舞台は京城の西大門周辺へと移る。汚らしい街の風景とそこに入り混じった朝鮮人と中国人のさまざまな生活の臭いに対する描写が続き、身を売って生計を立てるしかない可憐な朝鮮人娼婦「金東蓮」の姿が描き出される。また、植民地朝鮮の京城の街を行進する日本軍の姿、内地においては生徒たちの独立自尊の精神を力説していた校長が植民地においては朝鮮人生徒たちに向けて従順こそ美徳だと語る矛盾する姿などが立て続けに登場する。そして、物語は再び南大門駅前で起きた総督暗殺未遂事件へと移る。これまでの総督たちとは異なり、それなりに朝鮮人の心を得たと言われる今回の総督に対する朝鮮人青年の狙撃事件は、暗殺に失敗した同族のその青年を捕まえなければならない「趙教英」に大きな心の葛藤を引き起こす。

厳しい冬の日、生計を立てるために客引きをする娼婦たちの中には「金東蓮」の姿が見える。彼女はある客から日本へ渡った自分の夫が帰らないのは、関東大震災の際に日本人の手によって殺されたからだと聞かされ発狂する。そして街へ駆け出して人々にその真相を訴えるのだが、誰もその訴えに耳を傾けず、むしろ彼女は巡査に捕まってただ涙を流すしかない。

「趙教英」は以前朝鮮人生徒と日本人生徒の間に起きた喧嘩に対して朝鮮人生徒たちを擁護したため、ついてに巡査の職を辞めさせられる。唖然とした彼はこれからのことを考え、家族を心配する一方、この瞬間においてもどこかで独立の希望を抱いている朝鮮人たちの姿を頭の中に描いてみる。そして、殖産銀行の隣で寒さに耐えながら眠っているチゲの群れに入り、彼らを涙ながら叫び起こそうとする場面でこの作品は閉じられる。

以上「巡査の居る風景」のあらすじを追って作品の全体像を概観してみた。それではこの作品に対してこれまでどのような先行研究がなされてきたのか目を通してみよう。この作品に関しては多くの先行研究が存在するが、ここではその中でも代表的ないくつかの論考を紹介していおく。まず李元熙は作品の冒頭に登場する、自ら朝鮮人としてのアイデンティティを

www.kokugo.kr

拒否して「光栄なる日本人」になろうとする府議会候補のエピソードを通して、朝鮮人である「趙教英」が帝国日本の手先であるといえども、他の親日家のように日本に全的に同化されることを願わないと指摘する。つまり、この作品において「趙教英」は日本人のように生きていく自分の人生に対して後ろめたさと圧迫感を覚えており、これは一種の良心の呵責として読まれると述べる。[7]また、李善玉は電車の中で「ヨボ」という呼称によって起きた朝鮮人と日本人間の争いを眺める「趙教英」の視線を通して、作家の中島敦は「趙教英」が朝鮮人としての自分の存在を改めて認識する心理的なプロセスをうまく描いていると指摘する。[8]最後に柳相熙は電車において「趙教英」が日本人学生によって蔑視されたこと、朝鮮人青年と府議会候補者に対する日本人の「ヨボ」という差別語の使用など、これらの作品内の一連のエピソードが当時の帝国日本が植民地朝鮮において標榜していた内鮮融和政策がいかに空虚なものだったのかを作家である中島敦が鋭く批判するための手段だったと指摘する。[9]これらの先行研究の分析をまとめると、この作品は「趙教英」の目に映る植民地朝鮮の群像を通して作家である中島敦が当時の帝国日本による植民地統治がいかに空虚なものであり、また無謀なことであったのかを批判しており、植民地制度下において生計のため日本の手先にならざるを得なかった「趙教英」が自らの朝鮮人としてのアイデンティティを回復していく過程が作品に描かれている点を肯定的に評価している。

ただ、これらの先行研究において中島敦の植民地朝鮮に対する認識の度合いの低さに対する批判もなされていることも合わせて指摘しておかねばならない。たとえば、作品の中に登場する朝鮮人に対する表象において当時の朝鮮の風習に対する作家の理解不足や朝鮮人労働者に対する当時の日本人が持つ典型的な偏見が作品内に散見されることを、この作品および中島敦の植民地朝鮮認識の限界として提示している。[10]

中島敦が植民地朝鮮を舞台として書いた次の作品は「プウルの傍で」という初期の習作である。筑摩版第一次全集の第三巻に初めて収録されたこの作品は、正確な執筆時期は明らかではないが、1932年8月に旅順の叔父を頼って南満州および中国北部を旅行し、その帰り道で京城に寄っているため、この後に書かれたものとされている。[11]この作品は短編小説であるものの、前述した「巡査の居る風景」と同様に植民地朝鮮をとりまくいくつかのエピソードによって構成されている。全三章からなるこの作品は8年ぶりに京城にある母校を再訪した主人公「三造」が、新しくつくられたプウルの水面に身を浮かせて過去の京

7)李元熙(2001)「나카지마 아츠시의 초기작품과 조선」『일본학보』47집、pp.363-377
8)李善玉 (2003) 「中島敦序説—『巡査の居る風景』を中心として—」『일어일문학연구』47집、pp.335-350
9)柳相熙 (2004) 「나카지마 아쓰시(中島敦) 문학작품 속의 朝鮮—「巡査가 있는 風景」을 中心으로—」『일본어문학』23집、pp.365-385
10)たとえば柳相熙は前掲の論文において、しゃがんで小便をする朝鮮人を民族精神の卑屈さとして描写した部分について、作家の朝鮮民族に対する理解不足の表れとして厳しく批判している。
11)「解題」『中島敦全集』第三巻、1993、p.482

www.kci.go.kr

城での出来事を次々と思い出す構成となっている。まず第一章では久しぶりに母校を訪れた「三造」の目に映る8年の歳月によって変わってしまった校庭の風景に対する感慨が述べられる。そして8年前に、彼がこの中学校の生徒だった頃、修学旅行でいった奉天の記憶が喚起される。彼は先輩たちに連れられ異国情緒あふれる奉天の酒場で、まだ幼かった彼を興奮させるロシア女の目まぐるしい姿を思い出す。そして、奉天を発つ最後の日に彼の目に映ったのは大陸の広々とした野原を赤く染める美しい夕日であった。

第二章に入ると「三造」の思い出は自らの家庭環境におよぶ。思春期を過ごしていた中学4年生の彼は当時家で飼っていた黒猫以外は誰も愛することのできない少年であった。「三造」は自分を生んだ生母を知らず、自分を育ててくれた第一の継母も彼が小学校を卒業する頃に亡くなってしまった。そして、彼が17歳になったその年の春に第二の継母が家に来た。継母に対する理由なき憎しみはますます激しくなり、それは父親や腹違いの妹に対する憎しみへと膨らんでいった。反抗心からくる家族への憎しみによって成績優秀だった彼は次第に非行少年へと化した。春画に夢中になったり、禁止された映画鑑賞に行ったり、またはカフェーに入ってビールを飲んだりして、自らの鬱憤を晴らすことが彼の当時の生活の全てであった。ある日、継母と父親とが外出から戻り、お土産の蒲焼を「三造」に渡した。彼は両親に対する反抗心からそれを自分の黒猫にあげ、これをみた父親はこれまでの息子に対する不満を全て払拭するかのように彼に猛烈な暴行を加える。無抵抗のまま父親の制裁を受ける「三造」は自分を殴る父親が次第に理性を失っていくことをむしろ父親のこれまでの偽善が暴かれたこととして満足する。

過去の辛い思い出から目を覚ますために、「三造」は仰向けになって静かに水面に浮かんでいた自分の体を反転して泳ぎ始めた。何メートルも続かずすぐ息が切れてしまった彼が止まって顔を上げると、そこにはいつの間にか朝鮮服を着た女の子が立っていた。その朝鮮人少女を見かけたことによって「三造」は再び過去の記憶へと戻っていく。それはある日の夜、偶然出会った一人の朝鮮人娼婦との淡い思い出であった。父親と継母の待つ家に帰りたくなかった「三造」は街中を放浪したあげく朝鮮人娼婦たちの居住地にまで足を運んだ。そこで一人の朝鮮人娼婦と出会った彼は最初はその誘いを拒んだものの、次第に彼女のみせる物寂しげな表情に惹かれて、とうとう彼女の家へあがることとなる。片言の日本語しか話せない彼女の部屋に入った「三造」は布団を敷き体の交わりの支度をする彼女にお金を渡しながら、自分は何もしないからその金をもらってただ休んでほしいと話す。最初はその言葉の意味を飲み込めなかった彼女だが、ようやく「三造」の態度からその真意を察して二人は何事もなくその一夜を過ごす。この些細な冒険がどうして漏れたのか分からないが、それから三日くらい経った日の昼休みに「三造」は学校の上級生たちに無理やり裏山につれて行かれ、そこで生意気だといわれながら暴行を受ける。腕力に勝る彼らに思いのまま殴られた「三造」は一人草の上に倒れて己の惨めさと非力さを痛感する。

第三章において既にプウルから出た「三造」は再び眼下に広がる母校の校庭とその周

www.kigen.ki

辺に広がる京城の街並みを虚ろな瞳で眺める。先まで自分が身を沈めていたプウルにはいつの間にか三人の中学生が並んで泳いでおり、彼らの健康な体と自分の衰弱した体を比較した「三造」は、朝鮮人娼婦との出来事が原因で上級生に殴られたときに味わった「肉体への屈服」と「精神への蔑視」とを再び感じることとなる。

以上「プウルの傍で」の内容を大まかに辿ってみたが、この作品は先述の「巡査の居る風景」と比べ、同じ植民地朝鮮を舞台にしているにもかかわらず、作家自らの学生時代の体験にもっと充実していることが分かる。作品の中に繰り広げられているいくつかのエピソード、つまり植民地朝鮮における当時の学生生活の模様、不遇な家庭環境によってもたらされる思春期の反抗と葛藤のいきさつ、そして性に対する目覚めと朝鮮人娼婦との淡い一夜の出来事などは、中島敦の植民地朝鮮時代のありのままの姿を鮮明に映し出している。しかし、藤村猛が指摘しているように、作品があまりにも作家の私生活と密接に接続されており、植民地朝鮮という舞台設定にもかかわらず、主人公の孤独感や思春期の反抗心が過剰に描かれている点は残念に思われる。12)もちろん、田中益三が主張するようにこの作品に描かれる日本人少年と朝鮮人娼婦の設定が、単に思春期の少年がもつ性に対する欲望とロマンスを処理するためではなく、互いにあまりにも異なる背景と性質を持つ男女関係を提示することによって、はじめから成し遂げられない朝鮮人と日本人の挫折と擦違いを描き、朝鮮と日本の偽善的な融和に対する一種の批判を提示しているとも読み取れる。13)

最後にとりあげる植民地朝鮮を舞台とした作品は「虎狩」である。この作品は1934年7月の『中央公論』の新人原稿募集に応じて佳作となったもので、おそらくその締め切り日である同年4月30日頃までには執筆されていたと思われる。14)

植民地朝鮮の京城の郊外にある駐在所にある晩一匹の虎が現れ、ガラス戸を引っかいて勤務中の巡査を驚かせた逸話から始まるこの作品は、日本人である「私」と朝鮮人の父と日本人の母を持つ「趙大換」との関係を中心に進められる。二人は「私」が内地から竜山小学校へ転向して来た時から友達となり、片思いの少女を追いかけたり、百貨店に熱帯魚の観賞に出かけたりしながら、その友情を深めていった。　そして中学3年生の時、冬の発火演習に参加した「私」と「趙大換」が他の生徒たちと一緒に露営地にテントを張る作業をしていると急に大粒の雹が降り出してきた。その場にいた多くの生徒たちは身を守るためにまだ張られてないテントの中に我先にと逃げ込んだが、その際に「趙大換」がそばにいた上級生を肘で突き飛ばしてしまったのである。以前から「趙大換」を目障りに思っていたその上級生はその日の夜に彼をテントから外へ呼び出し暴行を加える。外の物音に気づいた「私」がテントから出てみると、暴行された「趙大換」は一匹の犬のように声を出し

12)藤村猛（2001）「中島敦「プウルの傍で」論」『近代文学試論』39号、pp.35-45
13)田中益三（1996）「夢見る頃を過ぎても―湯浅克衛と中島敦」『日本文学誌要』54号、pp.12-22
14)「解題」『中島敦全集』第一巻、1993、pp.482-483

www.kci.go.kr

ながら泣いていた。全てを察した「私」は彼を慰める言葉など見つからず、ただ彼を起上がらせて人目につかない場所へと付き添って歩いた。その間「趙大換」は「強いとか弱いとかって、一体どういうことだろうなあ」と何度も同じ言葉を口にした。最初はその意味を単に上級生に抗えなかった惨めな自分に対する独り言だと思っていた「私」は、次第にその意味が朝鮮人と日本人との関係性というもっと大きな対象へと広がっていることを悟る。「私」は結局「越大換」に何も語れなかった。それから間もなく彼は突然、「私」にさえ一言の予告もせずに街から姿を消してしまう。

「趙大換」が姿を消す二年程前のある冬の日「私」は「趙大換」に虎狩に誘われる。「私」は野生の虎を直接見れるかも知れないとものすごく興奮し、家に嘘をついて「趙大換」と一緒に朝鮮人猟師たちの虎狩へ同行する。一行は汽車に乗って雪道を走り、ようやく目的地の山の麓へと辿りついた。「私」と「趙大換」は彼の父親の後を追うようにして真っ白な雪山を奥へと入っていった。先に行かせた勢子たちが虎の足跡を見つけ、猟師たちは周囲にある松の大木に登り、虎が現れるのを待ち構えた。「私」もまた彼らと同じく地面から離れて木の上に登り、恐怖と興奮を覚えながら固唾を呑んで虎が現れるのを待った。しかしいくら待っても虎を現れるず、寒さと空腹に耐えかねた「私」はとうとう居眠りをしてしまう。そして、まさに「私」が居眠りをしているその間、ようやく一匹の虎が現れ、目の前の怯えている一人の勢子に襲い掛かろうとしていた。はっと目を開いてその瞬間を目撃した「私」は、続いて聞こえてくる銃声によって真っ白な雪の上に赤い血を流しながら倒れていく虎をみた。一同が木から下りて倒れた虎に近づきその様子を伺っている間、「趙大換」はあまりの恐ろしさに気を失っている勢子に近づき、意外にも彼が死んでないことを口惜しがる。

姿を消してしまった「趙大換」をそれから十五六年も経った三日程前に「私」は東京で偶然再会した。古本屋を漁っていた「私」は群集の中である男と目が会う。背が高く、無精ひげを生やしているその男は「私」に近づいてきてタバコを一本かりようとするのだが、その時まで「私」は彼が「趙大換」であることに気づかず、ただ昔の友人の一人だと思う。短い時間二人が他愛もない会話を交わした後、その男がみせる何気ない微笑みを見た瞬間「私」は彼こそ「趙大換」であることに気づくのだが、すでに通りかかりの電車に乗り込んだ彼は遠ざかっていく。

「虎狩」という作品はこのように「私」による「趙大換」への眼差しをもって、植民地朝鮮における日本人と朝鮮人との短い間の友情を物語っている。もちろん、李元熙が指摘しているようにそこには単に二人の少年の関係性だけでなく、「趙大換」が上級生に暴行された後に暗示する、朝鮮人と日本人との支配と被支配の状況に対する作家の批判的な意識をも読み取ることもできる。15)また田中益三が主張するように、この作品には先述した「巡査の居る風景」同様、「趙大換」という人物を通して植民地支配の現状が生み出した朝

15)前掲の李元熙（2001）論文

www.kci.go.kr

鮮人の精神的な屈折が描かれており、作家中島敦がいかに疎外された他民族に対して関心を寄せていたのかを分かる契機となる作品だといえる。16)

以上、中島敦の一連の植民地朝鮮を舞台とした作品を概観してみた。これらの作品は論者によっては植民地主義に対する積極的な批判を提示したものとして高く評価され、または植民地朝鮮を舞台にした単なるロマンスおよび私小説でしかないという非難を受けることもある。精神的にも肉体的にも最も多感な時期である十代の大部分を父親の転勤という自らの選択ではない外因によって植民地朝鮮という未知の世界で過ごすことを強いられた中島敦は、家庭内においても三人目の継母と父親そして腹違いの妹と相容れない共同生活を送り、孤独と苦悩に満ちた日々が続いたと思われる。そしてそのような自分をとりまく環境によってもたらされた自己に対する省察の眼差しは、次第に同時代を生きる植民地朝鮮の人々への眼差しへと発展し、これらの作品群を残すこととを可能にさせたに違いない。自らの不安な心情と疎外された存在としての実感を彼は作品の中の朝鮮人およびそれらの朝鮮人を眼差す日本人という登場人物たちに体現させ、植民地支配による朝鮮の屈託した現状を露呈させると共に自己の苦悩と皮肉が入り混じった暗部をも曝け出している。

3. 南洋への眼差し—「光と風と夢」

高校進学と共に植民地朝鮮から内地へと引揚げた中島敦は、その後東京帝国大学の国文科に入学し、卒業後は大学院に進み森鴎外に対する研究を続けるかたわら、父の門下生が理事長を務める横浜高等女学校で教師として働くこととなる。そしてこの横浜高等女学校に勤める間、中島敦はその文学者としての本格的な活動をはじめ多くの作品を書き残しているのだが、本節で取り扱う「光と風と夢」もまたその中の一つである。

南洋諸島を舞台とした作品である「光と風と夢」は1942年5月に『文学界』にその一部が削除された形で掲載され、後に中島敦の生前に刊行された作品集『光と風と夢』の表題作として収録されたものである。17)この作品は中島敦にしては珍しく全20章からなる長編小説で、『ジキルド博士とハイド氏』や『宝島』で有名な実在する英国人小説家「ロバァト・ルゥイス・スティヴンスン」を主人公とし、療養のため南太平洋のサモアで暮らした彼の晩年を章毎に一人称と三人称を使い分けながら物語を進める形式となっている。それではこの作品の内容分析を通してそこに描かれる中島敦の南洋への眼差しとのその認識を

16)前掲の田中益三(1996)論文

17)最初のタイトルは「ツシタラの死」であったが、『文学界』への投稿の際に、編集部の要請によって現在のタイトルへと変更された。また、『文学界』掲載の際に一部が削除されたのは、その内容における問題に起因するものではなく、あくまでも戦中の用紙配給制度による制約のためだとされる。(「解題」『中島敦全集』第一巻、1993、pp.483-484)

考察してみよう。

1884年5月南フランスにおいて35歳の若さの「スティヴンスン」は突然の喀血をおこした。医師の勧めに従って療養のため南太平洋へと向かった彼は、1889年の終わり頃サモアに着き、その地で新たな生活を始める。もちろん、最初から彼がサモアで余生を全うすることを考えたわけではないが、次第に深まる病のため結局その地での死を覚悟することとなる。故郷であるスコットランドへ帰れなくなり、また親しい友人たちに会えないことは辛かったものの、サモアにおける土地開墾と農場経営による自給自足の生活は彼にこれまで経験したことのない満足感を与える。

このように作品の冒頭において「スティヴンスン」は自分のサモアでの生活をあたかも西洋の文明社会から離れ自然へと回帰した人間の本来のあり方として認識するのだが、これはあくまでも西洋人であり支配者側に属す彼の視点によるもので、植民地のヒエラルキ構造の中において支配者側に属す原住民たちにとっては、それこそ権力者の自己本位的な考え方にしか映らないのである。このような「スティヴンスン」のサモアにおける植民地統治とそれに起因する捻じ曲げられた原住民の現状に対する無自覚および自己本位的な認識の様子は続く第二章においても確認できる。

幻想的なサモアの自然風景を絶賛する彼の眼差しは、その同じ自然の中で過酷な労働を強いられる原住民の労働者たちの姿には向けられない。自分たちの美しい自然風景を長閑に眺めることも許されず、同族による監視の下で白人主人の農場で働くサモア人の農民たちの姿は、「スティヴンスン」にとっていかなる疑念をも抱かせない。むしろ彼はそのようなサモア人たちとの表層的な交流を通して、西洋中心的な知識をもって彼らの民族性を独断で決定する。サモア人は陽気で大らかな民族性を持つという「スティヴンスン」の身勝手な先入観による判断は、彼らが大雑把で無責任であるという無意識での認識を暗示する。そしてその無意識の暗部は自らのサモアにおける生活に現れ、表層的な現在の生活に対する幸福感の背面に、常に自分が本質的にそぐわない環境の中にむりやり嵌め込まれている存在であるという自覚を芽生えさせる。

ここで物語は「スティヴンスン」という個人から離れ、今彼が立っている場所つまりサモアという地平をとりまく環境について述べられる。第五章はサモアとい土地がいかにして西洋人の手によって植民地化されたのかを詳しく説明する。1881年「ラウペパ」大酋長は王に即位し、有力者であった「タマセセ」と「マターファ」は交互に副王のなることを約束し、まず「タマセセ」が副王として即位した。しかしこの頃から白人の内政干渉がその度合いを増し、アピアには英国・アメリカ・ドイツ三国の領事館が置かれることとなる。また早い時期からドイツ人が経営する「南海拓殖商会」によってアピアの郊外には大農場が造られた。

> アピアの西郊ムリヌウ岬から其の附近一帯の広大な土地が独逸商会の農場で、其処でコーヒー、ココア、パイナップル等を栽培していた。千に近い労働者は、主に、サモア

よりも更に未聞の他の島々や、或いは遠くアフリカから、奴隷同様にして連れて来られたものである。

過酷な労働が強制され、白人監督に鞭打たれる黒色人褐色人の悲鳴が日毎に聞かれた。脱走者が相継ぎ、しかも彼等の多くは捕えられ、或いは殺された。 (p.156)

結局、長い間不満を募らせたサモアの住民たちはその農場への破壊工作を実行し、ドイツはこの状況を逆利用してむしろ彼らの王である「ラウペパ」に不平等条約にサインすることを脅迫する。英国とアメリカの反対にもかかわらずドイツは自分たちの要求を聞き入れない「ラウペパ」の代わりに「タマセセ」を新たな王に即位させる。王座から追い出された「ラウペパ」は後のことを「マターファ」に頼み、ドイツ軍によって逮捕されて姿を消す。その後、サモア人たちの支持と英国とアメリカの援護を受けた「マターファ」側は「タマセセ」とドイツ軍を撃退するのだが、サモアの独立がもたらす自国の損失をなによりも恐れた三国は、追放された旧王である「ラウペパ」を呼び戻し、新たな政府の王に即位させた。これによってサモアでは三国の傀儡としての「ラウペパ」とサモア人の支持を受ける「マターファ」によって再び対立が生じる。そして、この緊迫した状況下のサモアに療養のため訪れたのがすなわち「スティヴンスン」であった。厳然たる帝国と植民地という支配と被支配の構造、そして西洋人によって触発されたサモア人同士の葛藤など、「スティヴンスン」はこれまで自分が無関心であった植民地としてのサモアの現実に次第に目覚めるようになり、彼は自らの力による現状の打開に乗り出す。

「スティヴンスン」は本国のメディアにサモアにおける植民地政府の不当性を訴えたり、サモアの白人たちから非難を浴びながらも「マターファ」や「ラウペパ」との接触を通してサモア人たちの権益の回復に力を注ぐ。しかし、作品において「スティヴンスン」が行うこれらの活動は、あくまでも植民地政府の失策と私利私欲に走る官吏たちへの批判という範疇を越えることなく、サモアの完全なる独立に対する熱望とは隔たりを感じさせる。植民地政府とサモア人たちの間での架橋の役割を自ら担おうとする彼だが、その一方で時には次のような不満をも漏らしている。

政治的な事に立入るのは煩わしい。此の方面に於ける成功は、人格毀損以外の如何なる結果をも齎さない、とさえ思う。……私の政治的関心(この島に於ける)が減った訳ではない。ただ、長く病臥し喀血などすると、自然、創作に割く時間が制限されるので、此の上にも貴重な時間をとる政治問題が少々うるさくなることがあるのだ。 (p.201)

生業としての創作活動が病と共にサモアでの政治的な問題への関与によって妨げられることに対して、彼は煩わしさを感じる。彼にとっての植民地としてのサモア問題はその優先順位において創作活動より優るものではない。つまり、作品の中で「スティヴンスン」はあくまでも自分の存在意義である文学者としての体裁を保ったまま、内乱状態に陥ろうとするサモ

www.kci.go.kr

アの危機回避に従事する人物として描かれている。第九章および第十一章における「スティヴンスン」の文学に対する熱い愛情と真摯な態度はそれを裏付けるものとして読まれる。サモアの現状を通して植民地下の人々の苦しみに対する理解とその打破へと向けられた彼の情熱は次第に「マターファ」という一個人への同情へと縮小されていく。

ついに「マターファ」側と「ラウペパ」側との内乱の機運がが高まる。表向きにはサモア人同士の内乱のように映るこの戦争の実体が植民地原住民と帝国権力との戦いであるのはいうまでもない。しかしこの戦いに対する「スティヴンスン」の態度は次のようなものである。

> 私は、騒乱をよそに、じっとしておらねばならぬ。今となっては、どうにもならない。私が手出をしない方が、彼等哀れな人々にとって、尚、何等かの役に立ち得るかも知れぬのだ。膿がつぶれた後の後始末に就いて、我々が多少の援助をなし得る見込が、まだ、ほんの少しはありそうだから。 (p.215)

どうにかしてこの無益な争いを回避させようと尽力していた「スティヴンスン」は、いざ戦いが始まろうとするとその現実から一歩退き、「彼等」と「私」という線引きと共に傍観者の立場にで、その関心は早々に戦後処理の問題へと向けられる。つまり、「スティヴンスン」の目にはこの戦争があくまでもサモア人同士の争いとしてのみ映り、前述した帝国の支配に抵抗するサモア人という構図としては読み取られていない。そして戦争はあっけなく終わり、最後の勝者となったのは結局「ラウペパ」を代理人として戦わせた帝国側であった。戦いに敗れた「マターファ」が逮捕され収監されたのを知った「スティヴンスン」は彼を救済するため再び奔走するのだが、それはもはや敗者に対する勝者の情けに等しいものとして映る。なぜならば戦争が終わった後に作品の中で「スティヴンスン」は、以前の平和な日常生活に何事もなかったかのように戻り、執筆作業を続ける傍らサモアの白人社会との親交を深める様子が描かれているからだ。この後、作品は主に「スティヴンスン」の文学に対する持論の展開と、ヨーロッパ文壇に理解されない異国の小説家としての自画像、技術士の家柄に生まれながら小説家を志してきたこれまでの自分の半生を顧みる様子などが長々と続き、サモア人と植民地政府との対立の模様は次第に消し去られていく。

物語の終盤において先の戦争の際「マターファ」側に立ち、投獄された8人の酋長たちが「スティヴンスン」の邸宅を訪問する。彼らは自分たちが投獄されている間「スティヴンスン」がみせた親切さに対するお礼として、彼の邸宅と公道をつなぐ道路工事を請け負いたいと願い出る。しかし「スティヴンスン」はこのような彼らの申し出に困惑する。なぜならば、彼が知っている限りにおいて、サモア人がもっとも嫌う労働の一つが道路工事であり、またたとえ彼らがボランティアとしてそのような申し出をしたとしても、いざ工事が始まると多くの費用を自身が負担しなければならくなるということを彼が知っていたからである。最初はこのような疑念と不安に駆られた「スティブンスン」だったが、道路工事が始まって予想外に勤勉に働く

www.kci.go.kr

彼らの姿を見て次のように思う。

> 彼等の衝動が、道路完成迄永続きするか、どうか、それは私にとって毫も問題でない。彼等がそれを企てたということ。そして、サモアでは未だ曾て聞いたこともない様な事を進んで実行し始めたこと。——之だけで充分だ。試みに思え。之は道路工事——サモア人の最も忌み嫌うもの。此の土地では、税の取立に次いで叛乱の原因となるもの。金銭を以てしても刑罰を以てしても容易に彼等を誘うことの出来ない道路工事なのだ。
>
> この一事で、私は、自分がサモアで少くとも何か或る一つの事を成したのだと、自惚れていいように思う。私は嬉しい。実際、子供のように嬉しいのだ。(p.245)

この場面において「スティブンスン」はサモア人たちの善意による労働を自らのサモアでの存在意義を証明してくれた出来事として大変喜ぶのだが、その裏にはサモア人たちを教え導く存在としての自己認識が潜んでいる。彼らがこれまで忌み嫌った事、お金と刑罰をもってしても出来なかった事を、自分は彼らとの純粋な交流をもって成し遂げたという傲慢に近い自負がそこには見え隠れする。「スティブンスン」は自己を文明と啓蒙の場所に立つ先導者として認識し、サモア人はそこへと導くべき対象として眼差している。このような「スティブンスン」が持ついわゆる西洋人としての思考の限界性、もしくは帝国主義的およびオリエンタリズム的な眼差しは、道路工事が完了した後の祝賀会において彼が行う次のような演説においても読み取ることができる。

> 即ち、私の申上げたいのは、外敵に対する勇敢な戦士としての諸君の時代は既に終ったということです。今や、サモアを守る途はただ一つ。それは、道路を作り、果樹闘を作り、植林し、其等の売捌を自らの手で巧くやること。一口にいえば、自分の国土の富源を自分の手で開発することです。 (中略) 諸君の試煉の火が始まるのです。諸君が果して金であるか？鉛の屑であるか？真のサモア人は之を切抜けねばならない。如何にして？顔を黒く隈取って戦うことによってではない。家に火を放つことによってではない。豚を殺し、傷つける敵の首を刎ねることによってではない。そんな事は、諸君を一層惨めなものにするだけです。真にサモアを救う者とは、道路を聞き、果樹を植え、収穫を豊かにし、つまり神の与え給うた豊かな資源を開発する者でなければなりません。こういうのが真の勇者、真の戦士なのです。 (pp.246-248)

一見これからのサモア人の行く末を憂う真心をこめた忠告のようにも思われるこの演説にも、先の戦争によって自主的な独立と植民地政府の打倒に失敗したサモア人たちに残された最後の道が、野蛮な暴力による抵抗をやめて開発という名の文明化＝植民地化を受け入れることだという警告が潜んでいる。そして「光と風と夢」の最後の場面は、自分のサモアで果たした役割に満足した「スティブンスン」がその後持病の悪化によって倒れ、多くの

www.kci.go.kr

サモア人が悲しみと尊敬の思いを寄せて見守る中、彼が生前において指定した山頂の空地へと、逞しいサモア青年たちのリレーによってその棺が運ばれる様子が描かれる。

以上、中島敦が南洋諸島を舞台として描いた「光と風と夢」を、主人公である「スティブンスン」から読み取られるサモアの原住民に対する眼差しおよび自己存在に対する認識を中心に分析してみた。須藤直人はこの作品における「スティヴンスン」を、結核を患いながらも植民地抗争下のサモアにおいて、原住民たちに「ツシタラ（物語作家）」と親しまれながら、彼らと白人社会の融和と彼らの教化に務め、植民地政策を批判しながら、葛藤のうちに当地で絶命する人物として評価する。[18]また日野啓三は「光と風と夢」を明らかな植民地政治批判小説だとし、ドイツとイギリスのサモアにおける植民地支配がいかに酷いものであったのかを、「スティヴンスン」に成り代わって作家である中島敦が書いたものだと主張する。[19]確かに上記の二つの先行論が指摘しているように、この作品における「スティヴンスン」という登場人物、あるいは中島敦がモデルとした実在人物である「スティヴンスン」のサモアにおける行跡には、当地の植民地支配に対する批判と原住民に対するシンパシーが感じられる。しかし、本節においてこれまで分析したとおり、この作品に描かれているのは支配者側に属す「スティヴンスン」のサモア人のための崇高な犠牲の物語や、植民地支配の不当性に対して声高に訴える知識人の姿だけではい。中島敦はこの作品において、「スティヴンスン」という宗主国側の人間とサモア人社会との一連の交流を通して、彼の潜在意識における帝国主義的およびオリエンタリズム的な眼差しをも浮き彫りにさせているのだ。つまり、「スティヴンスン」という人物によって表象される宗主国人が持つ植民地に対するアンビバレンスな眼差しの矛盾性と限界性を批判的に描いている。そしてその批判の矛先が自ら帝国日本という宗主国に属す、中島敦本人にも向けられることから、この作品が彼の自己反省的な性格をも合わせ持っていると評価できる。ただ、この作品はあくまでも中島敦の想像によって書かれたものであり、彼が直接南洋諸島へと赴き、帝国日本の植民地と化した現地を自らの眼で確かめるのはその後のことである。

4. 南洋体験と作品—『南島譚』

中島敦が「光と風と夢」を脱稿したのは1941年の1月頃とされているが、この頃既に彼の体は長年の喘息とその合併症によって疲弊し、ついに教鞭をとっていた横浜高等女学校を休職することとなる。彼は療養のため叔父を頼って満州へ向かうことを考えていたが、同

18)須藤直人（2008）「中島敦の混血表象と南洋群島—ポストコロニアル異人種間恋愛譚—」『立命館言語文化研究』20巻1号、pp.49-63
19)日野啓三（2009）「中島敦・文学という恩寵—『光と風と夢』と『李陵』」『中島敦—生誕100年、永遠に越境する文学』、pp.114-127

www.kci.go.kr

年5月に友人から南洋庁への就職の話が急に持ち上がり、思い切って退職届を提出し南洋赴任を決意する。横浜港からサイパン丸に乗って南洋諸島へと向かった彼は、同年7月6日にパラオに着き、南洋庁において植民地の国語教科書編纂のための調査の仕事を任される。そして9月からは近隣の諸島を巡り、公学校における国語教育の現場調査を実施する。この時期の体験が後にいくつかの短編小説として描かれ、1942年11月に発行された第二作品集である『南島譚』に収録される。本節においてはこの『南島譚』に収録されている作品を取り上げて、そこに描かれている中島敦の南洋諸島対する認識を探る。

作品集である『南島譚』には＜南島譚＞と題されて「幸福」「夫婦」「雞」の三つの短編が、また＜環礁―ミクロネシヤ巡島記＞と題されて「寂しい島」「夾竹桃の家の女」「ナポレオン」「真昼」「マリヤン」「風物抄」の六つの短編が収めれれている。まずはこれらの作品の内容を概略的に紹介してみよう。

「幸福」という作品は南洋のある島で奴隷のような生活を強いられていた主人公が夢の中で島の長老となり、はじめは現実世界における奴隷としての習慣にその行動が制約されながらも、次第に権力者としての姿へと変貌していく様子が描かれる。「夫婦」には嫉妬深い「エビル」という女性が登場し、常に夫の浮気を疑う彼女がこれまでは周囲の女たちを腕力で制圧して自らの正当性を証明してきたものの、ある日よその部落から来た「リメイ」との戦いに敗れ、夫をとられて失意に駆られるのだが、すぐさま他の男性と結ばれて何事もなく生活を営む様子が島の伝統的な結婚式に対する描写を交えながら描かれている。「雞」には自分は南洋の人々をいまだに理解することが出来ないと告白する「私」が登場する。一部の日本人たちが短い間、南洋に滞在した経験をもってあたかも南洋の人々をすべて知り尽くしたかに結論づけるのだが、「私」はいまだ彼らを理解することが出来ないと主張する。時には「私」を傷つけ、また時には「私」を癒す彼らの不可解な行為は「私」にとっては永遠のミステリーとして残り、「私」が彼らを理解しようと努力して得るものとは、つねに彼らを理解できないという思いだけである。

「寂しい島」には現在五歳になる一人の少女を最後に、長い間子供が生まれて来ない不思議な島の話が述べられる。新しい世代が生まれず、年寄りだけが次第に死んでいくその島は、戦争や疫病に見舞われなくてもいずれは静かに歴史の舞台から消え去ってしまう運命であり、「私」は島民たちがすべて死絶えた後のその島の寂しい姿を想像する。「夾竹桃の家の女」は「私」がある日デング熱におかされた身体のまま、精神が朦朧とした状態で夾竹桃の紅い花が咲いている島民の家で出会った原住民女性との幻想的でエロチックな一瞬が描かれている。「ナポレオン」という作品では「私」が日本人警察官と共に傷害致死と窃盗の疑いで現在流刑されている「ナポレオン」という名を持つ原住民の少年を、もっと遠くの島へと送還する過程が描かれている。一度は脱出を試みるも失敗して再び輸送船に連れ戻されたその少年は、最後の流刑地である「T島」へ着くとすぐにその島民たちの間に溶け込んで、「私」がその島を離れる時には他の島民たちと共に浜辺で手を振

www.kci.go.kr

るという不思議さを持つ。「真昼」という作品には昼寝の心地よさの中で、「私」がこの南方の島へ来た真の理由について色々と思索をめぐらす姿がみられる。「私」の心の中のいくつもの声が交錯し、南方の島で無為と倦怠に陥る「私」に対して非難を浴びせたり、文明と非文明との間に横たわり己の存在意義について追究する「私」の自意識の変遷が描かれている。「マリヤン」は南洋諸島の文化の中心地であるコロール町に住む美しい島民の女性の名前である。いかにも植民地の場末といった感じの頽廃し、妙に虚勢を張った所の目立つ、貧しいその町に住む「マリヤン」は、東京のある女学校へ二三年在学したこともあるらしく、島では珍しいインテリー女性だが、それゆえ内地人と島民との間に挟まれた孤独な存在として描かれている。最後の作品は「風物抄」である。これは先述したように中島敦が実際に南洋庁において行った公学校視察の体験が基になっている。南洋の島々を巡回しながら現地の日本人同士の権力闘争や島民の子供たちに日本語を教える学校教育の実情などが、島々の美しい風景に対するノスタルジックな心情と共に描かれている。

このように中島敦は約8ヶ月という短い南洋諸島での滞在体験をこれらの作品内に散りばめている。南洋諸島が有する伝統的な風習と美しい景色を通して、異国情緒溢れるエロチックな島の女性を通して、異民族に対する理解不能の実感を通して、内地と南洋諸島の間に挟み撃ちになった孤独なインテリー女性の内面を通して、そして日本人によって統制および教化される島の子供たちを通して作品の中に具現化しているのだ。もし中島敦が長年の持病によって衰弱していなかったならば、これらの体験はもっとまとまった作品として世に送り出されたに違いない。しかし、そのような作業を行うには、南洋から帰ってきた彼の体は既にその肉体的な限界を越えていた。したがって、すでに取り上げた植民地朝鮮での体験に基づく一連の作品でみられる朝鮮人がおかれた厳しい実情に対する鋭い眼差しと、「光と風と夢」に見られるような植民地支配に対する批判や宗主国人として背負うアンビバレンスな自己認識への観察眼が、これらの作品においてはそれほど際立っていない。その代わり、南洋諸島に生きる現地の島民たちがいかに日本人である「私」とは異なる存在であり、彼らなりの伝統と風習にのっとった生活を営んでいるのかを穏やかな筆致で描くことで、むしろ当時の帝国日本が南洋諸島において推進した日本語教育に代表される、いわゆる同化政策がいかに虚しいものであるのかを照射する。

5. まとめ

中島敦は国語教科書にその作品が採録された数少ない作家の一人として広く知られ、そのためこれまで彼に対する研究も教科書に採録された作品を中心に中国古典から取材し

www.kci.go.kr

た漢文体の作品たちが主眼を成していた。しかし、中島敦はその短い人生の中で、植民地朝鮮や中国および満州、そして晩年においては南洋諸島へ出向くなど、意外にも行動範囲の広い作家であった。そして、それらの場所での体験は必ず彼の作品として結実するようになり、中でも植民地朝鮮を舞台として書かれた作品群については、早い時期から韓国と日本の研究者たちの関心が寄せられていた。本稿でも取り上げたように、これらの植民地朝鮮関連の作品群は、一方においては植民地主義に対する積極的な批判を提示したものとして高い評価を受ける反面、もう一方においては植民地朝鮮時代に対する単なる郷愁に基づいた私小説でしかないという批判も受ける。確かにこれらの作品群には、十代という多感な時期における体験がもつ限界性としての過度なノスタルジーやロマンスと、朝鮮人の風習や伝統に対する理解度の低さが認められる。また、当時の中島敦の不遇な家庭環境に起因する、作品全体を貫くニヒリズムや鬱屈した情緒の描写は確かに植民地朝鮮の厳しい実情というイメージを薄めるきらいがある。しかし、本稿において考察した通り、そのような中島敦を取り巻く不遇な環境がむしろ彼において自己に対する省察の眼差しを育ませ、それが次第に同時代を生きる他者への関心へと発展されたのを確認した。

そのような他者に対する眼差しと関心は植民地朝鮮を離れた後、今度は南洋諸島という新たな地平へと向かう。中島敦は自分と似たような境遇の実在人物である英国人小説家を主人公に、まだ足一本踏み出していない南洋諸島の風景とその地の人々の姿を「光と風と夢」の中に完璧に描き出す。文学者としての高い志を持ちながらも、持病による肉体の制約によってその道へと駆け出すことの出来ない「スティヴンスン」を、中島敦は自分の代理として小説に登場させているのだ。そして、彼の言動を通して作品の中で帝国の植民地支配を批判しつつ、また彼が持つ宗主国人としての矛盾性と限界性を批判的に描き出している。つまり、「光と風と夢」を通して中島敦は西洋が持つ帝国主義とオリエンタリズムに対して批判を加えると共に、同じく帝国日本とそこに属す宗主国人である自分自身へ二重の批判を加える。そして実際に南洋諸島を体験した後に書かれたいくつもの短編においては、既に病の深化による肉体的な限界の中にありながらも、自らの眼で確認した帝国日本が南洋諸島において遂行する統治政策の虚しさを、日本人である「私」と原住民である「彼ら」がいかに異なる存在であるのか、そして南洋諸島が持つ固有の特質を多くの作品に散在させることによって提示している。

「山月記」や「李陵」などに代表される、中国古典からモチーフを借りて、優雅な漢文調の文体を駆使し、芸術と人生について物静かに語る作家という、これまでの中島敦のイメージに、これからは帝国日本の外地を駆け巡り、その地に疎外された他者を見出し、彼らを独特な眼差しによって描き出した、外地作家としての中島敦像を付け加えなければならない。

www.kci.go.kr

【参考文献】

柳相熙 (2004) 「나카지마 아쓰시(中島敦) 문학작품 속의 朝鮮—「巡査가 있는 風景」을 中心으로—」『일본어문학』23집, 한국일본어문학회, pp.365-385

李善玉 (2003) 「中島敦序説—『巡査の居る風景』を中心として—」『일어일문학연구』47집, 한국일어일문학회, pp.335-350

李元熙(2001)「나카지마 아츠시의 초기작품과 조선」『일본학보』47집, 한국일본학회, pp.363-377

川村湊 (2009) 「帝国に抗する力を表現した作家」『中島敦—生誕100年、永遠に越境する文学』, 河出書房新社, pp.2-15

須藤直人 (2008) 「中島敦の混血表象と南洋群島—ポストコロニアル異人種間恋愛譚—」『立命館言語文化研究』20巻1号, 立命館大学国際言語文化研究所, pp.49-63

田中益三 (1996) 「夢見る頃を過ぎても—湯浅克衛と中島敦」『日本文学誌要』54号, 法政大学国文学会, pp.12-22

中島敦 (1993) 『中島敦全集』第一巻, 筑摩書房, 「解題」pp.482-483、pp483-484、p486

_____ (1993) 『中島敦全集』第三巻, 筑摩書房, 「中島敦年譜」pp.445-459、「解題」p.482

藤村猛 (2001) 「中島敦「プウルの傍で」論」『近代文学試論』39号, 広島大学近代文学研究会, pp.35-45

日野啓三 (2009) 「中島敦・文学という恩寵—『光と風と夢』と『李陵』」『中島敦—生誕100年、永遠に越境する文学』, 河出書房新社, pp.114-127

www.kci.go.kr

要 旨

本稿は中島敦の外地体験とその作品について考察したものである。一般に中島敦は長い間「山月記」が教科書に採録されたため、中国古典からモチーフを借りて、漢文調の文体を駆使し、優雅な文章を作りだす、いわゆる「純文学」作家として知られ、研究の場においてもそのような作品に主な関心が寄せられてきた傾向がある。しかし、中島敦は植民地朝鮮において小・中学時代を過ごし、何度かの満州および中国北部への渡航経験を持ち、また晩年においては南洋庁での勤務のため南洋諸島に滞在した経験をも持っている。そして、それらの外地体験をいくつかの作品といて書き記しており、中でも彼の植民地朝鮮を舞台にした作品群（「巡査の居る風景」「プウルの傍で」「虎狩」）についてのは既に多くの研究が進められている。しかし、植民地朝鮮から内地へと引揚げて、その後に彼が関心を寄せた南洋諸島とのかかわりを持つ作品群に対しては、これまで積極的な研究がなされていないのが現状である。したがって、本稿ではその二つの外地体験とそれらを記した作品とを合わせて分析することを試みた。植民地朝鮮を舞台にした作品群に見られる植民地支配に対する批判と疎外された他者に対する眼差しは、以後の南洋諸島を舞台として描かれた作品群（「光と風と夢」『南島譚』）においても継続されるのだが、それに加えて宗主国人としての自己省察的な眼差しも確認できる。またたとえそれが非文明的であっても固有の伝統と文化を有する他民族に対して帝国主義が強要する教化の虚しさを作品に描きだす。これまで理知的な作家という中島敦のイメージに、これからは植民地作家もしくは外地作家という情熱的な一面も付け加えなければならない。

キーワード：外地体験、植民地朝鮮、南洋諸島、帝国主義、異民族、植民地文学

투　　고：2013. 2. 28
1차 심사：2013. 3. 16
2차 심사：2013. 4. 6

www.kci.go.kr